

第2章 スーパーグローバルセミナー（SGS）

第1節 英語ディベートセミナー【担当：丹波大軌（英語）】

(1)事業名	英語ディベートセミナー
(2)学年	第1学年、第2学年
(3)対象人数	81人

(4) 目的と仮説（構想調書より）

企業・大学や研究機関等と連携した TGP（TOYONAKA グローバルプログラム）及び SGP（スーパーグローバルプログラム）の「課題研究基礎」「課題研究Ⅰ・Ⅱ」で、グローバルに物事を考えなければならない事例をクリティカル・シンキングやディベート、ケースメソッド等のアクティブラーニング型の学習法のプログラムを学習することで、学際的で超越的な幅広い知識・教養を身に付け、物事を幅広く深く考えたり、論理的に考えたりすることができるようになり、生徒の自己表現力を含めたプレゼンテーション能力やディスカッション能力を育成できる。

英語力として、TOEFL 65 点以上、GTEC 650 点以上を取得することができれば、大学院留学生、交換留学生、交流学生等とできる限り多くディスカッションを行うことができる。

(5) 概要

以下の能力を養うため、土曜午前に「即興型英語ディベート」講座を実施した。

①英語での発信力	②プレゼンテーション力	③コミュニケーション力
④論理的思考力	⑤批判的思考力	⑥幅広い知識と教養

即興型英語ディベートとは…ある1つの議題に対し、賛成側と否定側に分かれ、ジャッジを説得するために英語で議論することをいう。「即興型」では、資料を準備して全文を読むのではなく、その場で論理展開するスタイルでディベートが行われる。要点を書いたメモを頼りに、割り当てられた一定の時間内で、自力で英語を用いて話さなければならない。この環境こそが英語力アップに効果的である。また、勝敗が決まるという性質上、積極的になりやすいという特徴がある。

ジャッジを説得するために夢中になることで、上記の6点が知らず知らずのうちに養われていく。

1. 実施形態

応募者が多かったため、全体を A、B、C の3グループに分け、土曜日の午前中に A グループ 9:00-10:00、B グループ 10:10-11:10、C グループ 11:20-12:20 の時間帯で、年間6回実施。

2. 経過報告

① 募集状況

応募人数が81名と、例年に比べ大幅に増加した、（参考：昨年度約60名。また、昨

年度から費用が受益者負担となっている。)

② 実施状況

事前学習…豊高グローバルスタディーズ（後述）の2年生によるディベートのルール説明会を実施。

第1～6回…即興型英語ディベート。毎回3～4名によるチーム。

導入期は「宿題は廃止すべきだ」や、「修学旅行は、海外よりも国内の方が良い」など、取り組みやすい内容から始め、後半には「コンビニエンスストアは夜間営業をやめるべきだ」や「SNSは害より利益をもたらす」といったような社会問題や教育の問題も論題として取り上げるようになった。

③生徒の様子・学習の効果

アンケートの結果、「英語ディベートに取り組んでみて、楽しかったか」という質問には、「とても楽しかった」という回答が52%、「楽しかった」が45%となり、肯定的回答が97%を占めた。また、「この英語ディベート講習を通じて英語学習へのモチベーションがあがったか」という質問には、「とてもそう思う」が49%、「そう思う」が47%となり、96%の肯定的回答が得られた。

生徒の声としては、とにかく「楽しい!」という意見が多い。普段の授業では英語を話してコミュニケーションをとる機会がそれほど多くないので、「英語で自分の意見・考えを表現できるようになりたい」という思いをもって参加している生徒が多数いる。アンケート結果からは「もっと語い力をつけなければいけないと思った」や「授業での音読等をもっと大切にしていきたい」といったような英語に直接関係するものから、「もっと多角的に物事を見る力を付けたいと思った」「もっとさまざまな知識（教養）を身に付けようと思った」「相手に伝わる話し方（身振りやアイコンタクトなど）を意識するようになった」といったような、英語以外の要素の重要性について述べているものも見られた。

(6) 成果

1. 検証方法

GTEC for STUDENTS を実施。

2. 検証結果

目標達成者（GTEC for STUDENTS 650 点以上）

…29 名（そのうち、GTEC 700 点以上 18 名）※

※GTEC は Reading/Listening/Writing/Speaking の4技能の合計点で評価されるが、実施時期及び業者の都合で Writing/Speaking のスコアが3月上旬まで返ってこないため、Reading/Listening のスコアから換算して算出している。

<外部講師>

株式会社ヒューマン・ブレーション 引間 千尋 氏 他3名

第2節 ロジカルシンキング講座、表現力・コミュニケーション能力向上講座

【担当：森口竜平（地歴公民）】

(1)事業名	スーパーグローバルセミナー
(2)学年	第1学年、第2学年
(3)対象人数	37人（第1学年27人、第2学年10人）

(4) 概要

「論理的思考力」「他者と協働して思考・判断・表現を深める対話力」「自分の考えを発表する表現力」を養うため、土曜午前に、大阪市立大学大学院都市経営研究科非常勤講師 江口雅祥氏、京都光華女子大学短期大学部教授 鹿島我氏、株式会社 BHF 代表取締役 広瀬大輔氏、岡山大学全学教育・学生支援機構准教授 原田新氏を招聘した。以下の通り「ロジカルシンキング講座」（3回）、「表現力・コミュニケーション能力向上講座」（3回）を実施した。

1. 実施形態

土曜日の午前中 10:00-12:00 年間6回実施。

回	日付	内容	講師
1	5/25（土）	表現力・コミュニケーション能力向上講座①	鹿島 我 氏
2	6/1（土）	ロジカルシンキング講座①	江口 雅祥 氏
3	6/8（土）	表現力・コミュニケーション能力向上講座②	広瀬 大輔 氏
4	6/15（土）	ロジカルシンキング講座②	江口 雅祥 氏
5	7/6（土）	表現力・コミュニケーション能力向上講座③	原田 新 氏
6	7/13（土）	ロジカルシンキング講座③	江口 雅祥 氏

2. 経過報告

① 募集状況

1年生27名、2年生10名の計37名の応募があった。

② 実施状況

〔ロジカルシンキング講座〕

身近なテーマで頭をフル回転させるトレーニングをつむことを大事にし、第1回では「アンビシャス・ターゲット・ツリー」（目標マップ）を用いてやる気がでる実行プランの作成をした。第2・3回では「ブランチ」（因果関係図）を用いて物事を筋道立てて説明できるように指導を受けた。

〔表現力・コミュニケーション能力向上講座〕

第1回はプレゼンテーションの基礎を学び、第2回は社会においてどのような表現力・コミュニケーション能力が求められているのかについて、実践的な視点から学んだ。第3回は心理学という学問的立場から表現力・コミュニケーション能力について学んだ。各回とも講義を聴くだけではなく、ペアワーク・グループワークが取り入れられ、個人の中だけで完結せず、自分が考えたことを共有し、最後には全員の前で発表することが求められた。

③生徒の様子・学習の効果

〔ロジカルシンキング講座〕

最初は取り組みやすそうな様子であったが、徐々に「当たり前として受け止めていた物事」を疑い、あらためて分析し、論理的に手順を追って説明していく作業に、苦戦している様子が見られた。また毎回、グループ（2～3人）での作業が入るため、一人でじっくり考えるだけでなく、仲間と話し合いまとめる作業も求められ、1つの目標に向かってディスカッションを行うことにより、仲間と共に高めあう力も養成できていた。座席についても、できるだけ普段話したことの無い人とグループを組むように指示されたため、最初は戸惑い気味であったが、徐々に慣れていった。

〔表現力・コミュニケーション能力向上講座〕

最初は恥ずかしそうに緊張して発表する場面も見られたが、各講師の話を聞くにつれ、表現する技術の巧拙も大事ではあるが、「表現すること」に対する自分の考え方（例えば「こんなことを発表したら笑われる…」など）を変えるだけで、表現がしやすくなることに気づいたようである。回が進むにつれ、柔らかな表現ができる生徒が増えていった。

（５）成果

以下の図は、令和元年度の第6回（令和元年7月13日）と平成30年度の第6回（平成30年9月29日）にそれぞれとった生徒へのアンケート結果を、5点満点の加重平均スコアとしてまとめたものである（中間値3.0）。

	元年度	30年度
① この講座に参加して、楽しかった	4.32	4.47
② ブランチ（因果関係）で物事のつながりを整理できそう	4.53	4.42
③ アンビシャスターゲットツリー（目標マップ）で目標達成への道筋を整理できそう	4.56	4.47
④ 本講座で学んだことは、今後の人生や学習に生かせそう	4.65	4.63
⑤ 本講座への参加を他の生徒にも勧めたい	4.38	4.37

令和元年度は前年度に比べ、①以外は昨年度と比べて高い数値となっており、結果に満足していることがわかる。特に④の質問に対しては肯定的な回答が100%となった。今回はロジカルシンキング講座3回、表現力・コミュニケーション能力向上講座3回と、両講座とも短期集中型にしたため、各回の内容が凝縮されていたことが影響していると考えられる。

生徒アンケートの自由記述欄には生徒アンケートでは、「目標にすることを書くことで整理ができるので、頭の中で考えるよりも効率がよく、目標を達成しやすくなると思った」「この講座から『自分から何かを発信すること』の大切さを学びました」などの回答が見られた。自分の目標に向けて論理的に考えることや、自ら発信していくことの重要性を理解したようである。

また、本講座の受講生1名（1年生）が、JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテストにおいて、独立行政法人国際協力機構関西センター所長賞を受賞した。

第3章 豊高グローバルスタディーズ【担当：丹波大軌（英語）】

(1)事業名	豊高グローバルスタディーズ
(2)学年	第1学年、第2学年、第3学年
(3)対象人数	24人（1年5人、2年7人、3年12人）

(4) 目的と仮説（構想調書より）

企業・大学や研究機関等と連携した TGP（TOYONAKA グローバルプログラム）及び SGP（スーパーグローバルプログラム）の「課題研究基礎」「課題研究Ⅰ・Ⅱ」で、グローバルに物事を考えなければならない事例をクリティカル・シンキングやディベート、ケースメソッド等のアクティブラーニング型の学習法のプログラムを学習することで、学際的で超越的な幅広い知識・教養を身に付け、物事を幅広く深く考えたり、論理的に考えたりすることができるようになり、生徒の自己表現力を含めたプレゼンテーション能力やディスカッション能力を育成できる。

英語力として、TOEFL 65 点以上、GTEC 650 点以上、を取得することができれば、大学院留学生、交換留学生、交流学生等とディスカッションを行うことができる。

(5) 概要

1. 概要

英語ディベートセミナーで行っている「即興型英語ディベート」を平日の放課後にて実施している。さらに「準備型ディベート」、「英語でのプレゼンテーション」、「レシテーション（スピーチ暗唱）」、「多聴・多読」、「単語クイズ」などや英語で楽しめるゲームなどの英語力養成プログラムに加え、さまざまな外部プログラムや大会にも参加し、豊高発「グローバル人材」の育成を行っている。

2. 実施形態

①必須参加：火、木曜日放課後 16:30(木曜日 15:30)-18:00

②任意参加：月、水、金曜日放課後 16:30-18:00

3. 経過報告

① 募集状況

1 年生対象に 10 名程度募集し、5 名の応募があった。継続参加の 2 年生 7 名と合わせ、計 12 名で活動を開始した。

② 実施状況

- ・即興型英語ディベート…火曜放課後に実施。
- ・準備型ディベートや、単語の暗唱、1 分間スピーチ、英語を使ったゲームなど。
…木曜放課後に実施。
- ・英語ディベートセミナーのルール説明会 (5/16)
- ・国内留学プログラム参加 (7/22-26)
- ・能勢高校とのスムーズスペースを用いた交流 (7/18)
- ・英国語学研修参加 (7/20-8/1)
- ・外部プログラム参加
 - 7/25, 26 : 関学 高校生国際交流の集い 2019 (2 名)
 - 7/26 : AIG 外交官日本プログラム (3 名)
 - 7/25-8/2 : GLHS 海外派遣研修アメリカ (1 名)
 - 8/3-8/12 : おおさかグローバル塾 英国リーズ大学短期留学 (1 名)
 - 8/14 : 日本文化体感プログラム (1 名)
 - 11/3 : 学生シンポジウム「これからの時代を考える 2019」 (4 名)

第4章 海外・国内フィールドワーク・英語学研修

本校 SGH 事業においては、5 年間の取組みのなかで、海外の生徒との交流や研究を通して、よりグローバルな視点に立った課題研究を行う生徒を育てることを目的の 1 つとしている。今年度は海外フィールドワーク（研修）を 2 つ行った（3 月初旬に国内フィールドワークを九州にて行う予定）。

第1節 海外フィールドワーク【担当：森口竜平(地歴公民)・丹波大軌（地歴公民）】

(1)研修名	SGH インドネシアフィールドワーク
(2)対象生徒	本校第 1、2 学年生徒
(3)参加人数	本校第 1 学年生徒 4 名、第 2 学年 6 名（女子 10 名）
(4)実施日程	令和 2 年 1 月 4 日(土)～1 月 7 日(火) 2 泊 4 日

(5) 実施概要

月日 (曜)	訪問先等 (発着)	現地時 刻	実施内容
1 月 4 日 (土)	関西国際空港着 関西国際空港発 デンパサール着 デンパサール発 ジャグジャカルタ着 ホテル到着	08:30 10:30 16:50 19:25 20:00	各自集合 到着後、入国審査 国内線にてジャワ島のジョグジャカルタへ 夕食、市内のホテルへ
1 月 5 日 (日)	ホテル出発 ボルブドゥール訪問 APIKRI 訪問 ホテル到着	8:00 08:30 12:00 19:00 21:00	 * 仏教遺跡の見学 * フェアトレードの学習 * 昼食 夕食(市内レストランにて)
1 月 6 日 (月)	ホテル出発 BMD 高校訪問・学校交流 ジョグジャカルタ着 ジョグジャカルタ発 デンパサール着	9:00 午前中 14:30 16:20 18:40	現地の学校にて研究交流・文化紹介・発表 (Budi Mulia Dua International School) ジョグジャカルタ空港にてチェックイン 国内線にてデンパサールへ 到着後、国際線に乗り継ぎ手続き 空港内にて各自夕食
1 月 7 日 (火)	デンパサール発 関西国際空港着	00:45 08:30	入国審査後、解散

（６）目的と仮説

本校 SGH 事業における第 2 学年課題研究の授業では、GLOBAL VISION 1～4 のテーマについて研究を行ってきた。それらの研究をさらに深めるため、平成 30 年度の海外フィールドワークではマレーシアを訪問し、GLOBAL VISION 3 イスラーム諸国と 4 比較文化の研究を進めることを中心に研究活動を行った。今年度は特に GLOBAL VISION 1 のフェアトレードと GLOBAL VISION 目的 3 イスラーム諸国と目的 4 の比較文化の研究を目的として、インドネシアでフィールドワークを実施した。この研修を通じて、よりグローバルな視点に立った課題を設定できる生徒を育成する。

（７）事前・事後指導

月	日	曜	内容	時間帯
9	26	(木)	顔合わせ・今後の予定の確認	昼休み
10	17	(木)	事前学習① 先輩たちの研究を学ぶ	昼休み
10	31	(木)	事前学習② テーマ・班の決定	昼休み
11	7	(木)	事前学習③ テーマ研究	昼休み
11	28	(木)	事前学習④ テーマ研究	昼休み
12	12	(木)	事前学習⑤ 発表準備	昼休み
12	19	(木)	事前学習⑥ 各班のプレゼン（発表）	放課後
12	21	(土)	保護者説明会	午後
12	24	(火)	事前学習⑦ 発表最終リハーサル	放課後
1	4	(土)	インドネシアへ出発（～1月7日）	
1	16	(木)	成果発表準備（ポスター発表）	昼休み
1	30	(木)	成果発表準備（ポスター発表）	昼休み
2	3	(月)	成果発表準備（ポスター発表）	昼休み
2	5	(火)	SGH・生徒研究発表会（ポスター発表）	午後

現地でのフィールドワークを深めるため、毎週木曜日に事前学習を行った。事前学習の初めに、生徒の興味関心に応じての班に分け、それぞれにフィールドワークを通じて研究したいテーマを決めさせた結果、テーマは以下のとおりになった。

- ①イスラームの女性
- ②日本でハラルフードを広めるために
- ③インドネシアの暑さ対策

事前学習にて各テーマについて造詣を深め、それを参加生徒全体で共有した上でさらに、3 日めの高校交流会にて英語で発表するための準備を行った。学習テーマの発表とあわせて、日本文化の紹介や豊中高校紹介についても、生徒たちが分担し、パワーポイントで発表できるように準備を行った。また、日本で流行している曲のダンスを交流会で披露するための練習なども行った。

（８）成果

A SGH・生徒研究発表会による発表

帰国後、フィールドワークの内容を 2 枚のポスターにまとめ、令和 2 年 2 月 5 日の SGH・生徒研究発表会にてポスター発表を行った。フィールドワークで学んだことを、自分たちで整理し、学校全体に広げる枠組みができたことは、大きな成果である。また、ポスター発表については、2 年生が自分たちの課題研究 I の授業の発表をしなければならなかったため、1 年生が交替で発表を行った。1 年生にとっては、初めてポスターを作成し、そのポスターを使い、発表したことにより、次年度の第 2 学年課題研究活動の予行ができたと考えられる。来年度課題研究の中核となる人材となってくれることを期待する。

B アンケート結果から

生徒がどれだけグローバルな視点で考えることができるようになったかを測るため、帰国後にアンケートを実施した。質問項目と平均値(5点満点)は以下のとおりである。

質問項目	平均
1. 全体を通して今回のフィールドワークは面白かったですか。	4.6
2. フィールドワークの内容は自分なりに理解できましたか。	4.3
3. フィールドワークの内容は自分にとって高度な(専門の高い)ものでしたか。	3.6
4. 今回の研修で扱った内容について、今まで知らなかったことを自分で調べてみようと思いましたか。	3.9
5. 今回のフィールドワークを通して国際社会に関する興味・関心がさらに高まりましたか。	4.3
6. 今回のフィールドワークを通して人とコミュニケーションをとり、人前で発表するための力が高まりましたか。	4.2
7. 将来留学したり、仕事で国際的な場で活躍したりしたいと思うようになりましたか。	3.8
8. 以前より英語力を高めたい(高める必要がある)と思うようになりましたか。	4.6
9. 将来何らかのかたちで、グローバル社会に貢献するリーダーになりたいと思うようになりましたか。	3.9

(それぞれについて、①とてもそう思う(5点) ②そう思う(4点) ③どちらともいえない(3点) ④あまりそう思わない(2点) ⑤全くそう思わない(1点)を点数化し、平均値をとった)

どの項目においても否定的な回答をした生徒はおらず、個別の回答に関しても概ね肯定的な評価であった。また、すべての生徒が「6. 今回のフィールドワークを通して人とコミュニケーションをとり、人前で発表するための力が高まった」や「8. 英語力を高めたい」という項目に対して、肯定的回答をしていた。高校交流における、海外の生徒に発表したりグループワークをする機会を通して、世界で活躍するために何が必要かということを身をもって体験することができたことが、これらの項目に影響していると考えられる。一方で、「7. 将来留学したり、仕事で国際的な場で活躍したりしたい」「9. グローバル社会におけるリーダー養成」については、他の項目に比べて自己評価が低く、フィールドワークを通して、生徒に自信をつける面での達成率が課題となった。今回は日程の都合上、2泊4日と旅行期間が短く、訪問先も限られていたために、これらの項目の内容に対する自信を高めるまでには至らなかった。日程・行程については次年度に向けての新たな課題と考えられた。

C 生徒レポートから

フィールドワーク終了後、生徒に対してアンケートを行うとともに、「フィールドワークを通じて学んだこと・感じたこと」をテーマにレポートを課した。以下はそのレポートから抜粋する。

「ムスリムの高校生と接することにより、自分が知らないうちにムスリムに対して自分とは違った存在だと、変な先入観や偏見を持っていることに気づき、どんな服を着るかも何を信仰するかも自由で、自分と違う服を着ているからといって、変に判断してはいけなく、認め合うことが大切と学んだ。」「地域による格差を感じ、ホテルの周辺は道路などが整備されている一方で、体験学習で訪れた場所は外灯がなかったりと、授業で習う所得格差や地域格差はこういうことと感じた。」「学校交流を通じて、圧倒的な単語不足を痛感したので、もっと勉強して、次に海外に行くときにはもっと英語力を高めたいと思った。」「イスラム教については日本で知る機会が少ないうえ、とても厳しい宗教だと思っていたが、制限の厳しい国とそうでない国があることを知った。」

(9) 課題

- ・研究活動について、今年度も事前学習で時間をかけて行うことができたが、昼休みの時間帯を使ったため、テーマについてしっかりと探究し、より深い研究活動にまでは進めることが出来なかった。今後も昼休みなどを使用することを考慮すると、募集時期を早め、長い期間を通じて、事前学習を行っていく必要があると考えられる。



1/5 ボロブドゥール世界遺産見学



1/5 APIKRI 訪問



1/6 学校交流会 (Budi Mulia Dua International School)



第2節 国内フィールドワーク【担当：渡辺尚樹（地歴公民）・手代木佑衣子（芸術）】

(1)研修名	SGH 熊本・宮崎フィールドワーク
(2)対象生徒	本校第1、2学年生徒
(3)参加人数	本校第1、2学年生徒(男子6名、女子11名)
(4)実施日程	令和2年3月5日(木)～3月6日(金) 1泊2日 [実施せず]

(5) 実施概要

3月5日 (木)	8:30	伊丹空港集合	
	9:25	伊丹空港発	ANA523 便
	10:35	熊本空港着	(中型バス借り上げで移動)
	11:00	熊本城見学・熊本市街散策	
	12:30	① 熊本国際交流会館訪問 (熊本市中央区花畑町 4-18)	①熊本市のムスリム対応の 取り組みを学ぶ
	14:30	② フェアトレードくまもと推進委員会事務局訪問 (熊本県熊本市中央区新屋敷 1-9-7) 高千穂町へ移動 かりぼし 泊 (宮崎県西臼杵郡高千穂町三田井 1073-3)	②熊本市のフェアトレード の取り組みを学ぶ 高千穂町内泊
3月6日 (金)	7:45	かりぼし 発	
	8:00	高千穂峡散策	ボートに乗船
	9:30	高千穂峡発	
	10:00	③五ヶ瀬自然エネルギー研究所見学 (宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町大字三ヶ所 2109)	③五ヶ瀬町の小水力発電に ついて学ぶ
	11:30	④宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校訪問 (西臼杵郡五ヶ瀬町大字三ヶ所 9468-30)	④発表リハーサルを見学し、 協議
	15:00	五ヶ瀬発	
	16:40	熊本空港着	
	17:30	熊本空港発	ANA526 便
	18:35	伊丹空港着	諸連絡後解散

(6) 目的と仮説

本校 SGH 事業における第2学年課題研究Ⅱの授業では、VISION1～4のテーマについて研究を行っている。それらの研究に対する「準備」及び「まとめ」として、平成31年度の国内フィールドワークでは、昨年度と同様に、第1、2学年生徒を対象に、熊本県・宮崎県を訪問する。プログラムの中では、VISION1のフェアトレードとVISION2の地球環境問題、VISION3、4のイスラームに関する諸問題を学習できるよう、平成23年にアジア初の

フェアトレードタウンに認定されており、自治体として初めて HDC（マレーシアハラル産業開発公社）と協定を結ぶなど、先進的な国際的取り組みを行っている熊本県熊本市（熊本大学・フェアトレードくまもと推進委員会）や、水力発電を活かした地域活性化の分野において全国でも有数の取り組みを行っている宮崎県五ヶ瀬町（五ヶ瀬自然エネルギー所）にてフィールドワークを行う。また、SGH 校である宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校を訪問し、研究に関する交流を行う。このプログラムを通じて、最先端の取り組みを意識させるとともに、課題研究活動に対する生徒の興味関心を引き出し、今後の研究の中核となる人材を育成する。

（７）事前・事後指導（予定）

月	日	曜	内容	時間帯
2	5	(水)	参加者確定	
2	12	(水)	事前学習① 顔合わせ・事前学習課題の配布	昼休み
2	17	(月)	事前学習② 事前学習課題の共有	昼休み
2	27	(木)	参加者説明会	放課後
3	5	(木)	フィールドワークへ（～6 日）	
3			レポート・アンケート	
4			課題研究の授業時に報告	

現地でのフィールドワークを深めるため、昼休みに 2 回事前学習を行った。2 月 12 日には顔合わせを行うとともに、フィールドワークに関連する 3 つの課題文を配付した。

課題文は以下の 3 つである。

- ・佐藤寛 『フェアトレードを学ぶ人のために』（世界思想社、2011 年）より第 1 章
- ・室田武他 『コミュニティ・エネルギー 小水力発電、森林バイオマスを中心に』（農山漁村文化協会、2013 年）より第 3 章
- ・アクマル・アブ・ハッサン他 『決定版「ハラル」ビジネス入門』（幻冬舎ルネッサンス、2014 年）より第 1、2 章

2 月 17 日に事前学習課題を読んで考えたことや感想などを 1 分スピーチという形で共有した。特に今年度は、課題研究Ⅰを終えた文理学科 2 年生も今回のフィールドワークに参加するため、課題研究Ⅰの中で自分たちの班が作成したポスターを用いて、1 年生に向けて研究内容の発表を行った。発表を聞くことにより、1 年生は今後自分たちが行うべき研究がどのようなものかイメージすることができ、今回のフィールドワークにおいても、今後の自分たちの研究を意識しながら学ぶことができると期待している。

第3節 英国語学研修【担当：城台祐樹（英語）】

(1)事業名	平成31年度 英国語学研修
(2)学年	第1学年、第2学年
(3)対象人数	50人（男子23人、女子27人）

(4) 目的と仮説（構想調書より）

海外でのフィールドワーク、学校訪問、インターネットなどを活用して海外の生徒との交流や共同研究ができれば、よりグローバルな視点に立った課題を設定することができる。

(5) 概要

A 研修旅行の概要と目的

1. 実施日時：令和元年7月20日～8月1日（13日間）
2. 実施場所：イギリス イングランド イーストボーン市 Eastbourne College
3. 活動内容：1）ELAC（語学学校）主催のインターナショナルプログラムに参加
（欧州や中東から参加した同年代の高校生と、英語の授業参加、スポーツや文化活動を共にして過ごす。日本文化紹介のプレゼンテーションを行う。）
2）夜と週末はホストファミリーと過ごす
3）ロンドン等への日帰り旅行
4）外国生徒や現地の人に、文化の違いに関するリサーチを行い、帰国後考察を行いまとめる
4. 実施目的：1）授業（主にディスカッション）や海外の生徒との活動を通して、英語を用いたコミュニケーション能力を、また、日本文化紹介などを通して英語のプレゼンテーション能力の育成を図る。
2）イギリス及び交流生徒の国に対する異文化理解の促進を図る。
3）世界で使われている英語に触れることによって、英語学習に対するモチベーションを高め、今後の目標設定に役立てる。
5. 利用旅行会社：近畿日本ツーリスト 関西国際交流センター
6. 付き添い教諭：箕嶋（英語科）、鶴田（英語科）
（近畿日本ツーリストから添乗員（阪井美帆さん）が同行）

7. 参加生徒:本校生徒1・2年 50 名

(研修旅行中の経過については、本校 HP の英国語学研修ブログにて伝えた。)

B 研修旅行説明会及び指導日程

案内パンフレットの配布: 新2年は3学期終業式日、新1年は3月 19 日配布

4月 6 日 (土) **13:00 旅行説明会(保護者同伴)**

17 日 (水) 申し込締め切り

22 日 (月) 16:30 選考テスト (TOEIC Bridge/日本語作文)

24 日 (水) 参加者決定 (50 名)

27 日 (土) **13:00 第1回説明会(保護者同伴)**

諸費用振り込み、パスポート取得、書類記入法

任意保険案内、外貨の両替

5月 14 日 (火) 日本文化紹介班分け、リサーチに関して

6/18 までに原稿作成、NET による添削、班別リサーチトピックの決定

5月 17 日 (金) 申込み書、アプリケーションフォーム、

パスポートのコピー提出

6月 15 日 (土) **13:00 第2回説明会(保護者同伴)**

ホームステイの心得、旅行用品案内

22 日 (土) 諸費用入金の締め切り日

7月 13 日 (土) **14:45 最終説明会(保護者同伴)**

出発当日案内、最終諸注意、荷物タグ・任意保険証・外貨の手渡し

帰国後の課題(アンケート、作文、リサーチのまとめ)の指示

7月 10 日(水)～18 日(水) イギリス文化、英語表現に関する特別授業、

日本文化プレゼン予行①、(NET による)グループ別プレゼンの英語、

発音チェック実施、プレゼンの修正、リサーチの準備

7月20日(土)～8月1日(木) 英国語学研修

帰国後

8月 23 日 (金)までに、アンケート、課題文、リサーチのまとめの提出

その後 上記課題を冊子にまとめて編集し、参加生徒に配付

C 英国語学研修アンケート結果 (回答者 40 名)

研修旅行に関して

1) 英語授業の内容

A) とてもよかった 25人 B) ある程度よかった 24人 C) 少し不満が残る 1人 D) 不満である 0人
(とても難しいときがあった)

2) アクティビティの内容

A) とてもよかった 41人 B) ある程度よかった 8人 C) 少し不満が残る 1人 D) 不満である 0人
(ルールを守れない人がいた)

3) イブニングプログラム

A) とてもよかった 38人 B) ある程度よかった 9人 C) 少し不満が残る 3人 D) 不満である 0人
(水泳がなかった/ルールが曖昧/日本人で固まりすぎた)

4) ロンドンへの旅行①

A) とてもよかった 40人 B) ある程度よかった 9人 C) 少し不満が残る 1人 D) 不満である 1人
(バスの臭いで酔いそうだった)

5) ロンドンへの旅行②

A) とてもよかった 36人 B) ある程度よかった 10人 C) 少し不満が残る 2人 D) 不満である 0人
(電車で行きたかった/同上)

6) Hastings への半日旅行

A) とてもよかった 23人 B) ある程度よかった 25人 C) 少し不満が残る 2人 D) 不満である 0人
(説明の英語がなかなか理解できなかった/)

7) 他国の生徒との交流

A) とてもよかった 36人 B) ある程度よかった 13人 C) 少し不満が残る 1人 D) 不満である 0人
(昼ごはんを誘っても結局一緒に食べられなかった)

8) ホストファミリーとの生活

A) とてもよかった 38人 B) ある程度よかった 11人 C) 少し不満が残る 0人 D) 不満である 1人
(起床・就寝時間が異なり、ほとんど顔を会わせず話せなかった)

9) 日本文化のプレゼンテーション

A) とてもよかった 41人 B) ある程度よかった 9人 C) 少し不満が残る 0人 D) 不満である 0人

2 事前準備に関して

1) 準備は十分できましたか。

A) 十分できた 37人 B) ある程度はできた 16人 C) あまりできなかった 2人 D) 全然できなかった 0人
(当日朝に準備した)

2) 次回参加者に対してどんな準備をしておけばよいか、書いてください。

服は多めのほうがいい/無駄な服は要らない/リスニングは事前にやっておく/どこで何が買えるか確認しておく/単語/有名な映画や歌手はある程度知っておくとよい/ガイドブックがあれば役立つ/洗濯の頻度で服の量が変わる/アドリブ力/寒暖差に適した服/話しかける勇氣/日本文化について班員全員が説明できるようにする/日常で使う単語/辞書/早めの準備/ホストへのプレゼント/どうやって楽しませるか/積極性/デビットカード/異文化理解/臨機応変に対応する力/日本文化を説明する英語/ゴミ袋/チャレンジ精神/日本のお菓子/日本料理を作ってあげる準備/即興力/リサーチ用の写真やイラスト/インスタグラム/ホストと遊べるもの/身のまわりの政治や環境、社会問題への意見/水筒

3 英語に関して

1) 学校・ホストファミリー・お店・その他で、英語は聞き取れましたか。

A) よく聞き取れた 6人 B) 何とか聞き取れた 37人 C) あまり聞き取れなかった 7人 D) 全く分からなかった 0人

(日本で聞く英語と全く違った/何度も聞き返した/スピードが速い)

2) 自分の言いたいことを伝えることができましたか。

A) 十分できた 13人 B) ある程度できた 31人 C) あまりできなかった 6人 D) 全くできなかった 0人

(即興力がない/発音が悪い/文法を気にしすぎた/単語がわからない/頭の中ですぐ翻訳できない)

3) 研修を通して、どのような英語に関する力がつきましたか。

わからないと伝える力/日常で使う言葉/リスニング/とっさに返答する力/相づち/知っている単語で伝える力/コミュニケーション能力/会話を続ける力/聞き返し/怖がらず話しかける力/間違いを恐れず話す力/積極性/英語の歌詞が聴けるようになった/脳内変換/ジェスチャーへの理解と使用/スピーキング/反対意見を述べる/口語表現/

4) 英語に関して苦労したことと、今後の自分の課題を書いてください。

発音/語い量/何を言っているかわからない/伝えたいことが英語にならない/瞬間的に対応する力/状況がわからない中での会話/慣れない主題でのディベート/リスニング/授業での英語の説明がわからない/スピーキング/積極性/正確に伝えられる単語や文法/日常で使う表現/とっさに文章を組み立てる力/細かいことまで伝えられる力/日本にいる外国人との会話/文法を気にしすぎて会話が詰まった/時制/意見を言う力/早い英語の聞き取り/Yes, No の後の理由を述べる/言いたいことをどう表現するのか/質問の意図が汲めない/英語の訛り/日本語と英語の違い/

4 研修旅行全般に関して感じたこと (研修で学んだり身に付いたこと、今後の課題、その他感じたことを自由に書いてください。)

文法の間違いを恐れず自分から積極的に話しに行くことが大切/日本人のスピーキング力は圧倒的に低かった/これからスピーキングを頑張る/街を歩くと様々な文化の違いを体験した/異なる文化や習慣にも徐々に慣れていった/自立して自分のことはある程度自分でできるようになる必要がある/思っていたより食べ物がおいしかった/人見知りせずたくさん友達ができた/たくさん間違えることで成長した/ホストと過ごす時間が一番楽しかった/わかるまで説明してもらって、そのままにしないことが大切/授業でもっと発言すればよかった/自分の価値観を基準にせず色々な価値観を理解できた/自分から進んで行動できた/簡単な世間話をする力を付けたい/事前に調べたり時間を守ったりする当たり前の重要性に気づいた/笑顔が大事/自分なりの精一杯を出せた/自分の表現でも相手に伝わるとうれしかった/ただ思うのではなくそれをはっきり伝えること大切/同世代の外国人の大人っぽさを見習いたい/防犯意識が高まった/スマホに依存しすぎない/もっと語いを増やして会話を弾ませたい/ついつい日本の感覚が出てしまった/自分の価値観を見つめなおすいい機会だった/時間をどう過ごすかは自分次第/今まで以上に英語が好きになった/臨機応変に対応する力がついた/当たり前と思っていたことが覆された/何でもまずは試してみることが大切/スケジュールなど自分のことに責任を持つことの重要性/もっと長くいたかった/毎日英語漬けだったので英語が身近に感じた/スポーツを通じて外国人の友達がたくさんできた/母語や宗教は違えど、みな同じ人間/周囲に臆せず話することができた/自分の話したいことをもっと話したい/もっと英語を頑張らなくてとは痛感した/日ごろからしっかりと自分のことは自分でできていなければならない/精神面でも成長した/環境問題や社会問題へも関心を持つようにしたい/国籍などで偏見を持たない/不安から日本人同士で集まることも多かったことが反省/自分の今の英語力にも少し自信がついた/自分が知らなかった文化や国へ興味がわいた/豊高生同士も仲良くなった

D Global Assessment 調査結果から

研修旅行直前と直後に、近畿日本ツーリストの協力の下、“Global Assessment”という意識調査を行い、参加生徒の、語学力、コミュニケーション能力、主体性、積極性、チャレンジ精神、協調性と柔軟性、責任感と使命感に関する分野(全15項目)の意識調査を行った。その結果を以下に示す。研修前後のアンケート項目を比較すると、ほとんど全ての項目においてポイントが上がった。とりわけ、「積極性」、「対応力」、「発進力」、「人脈形成力」が養われたことが分かる。

調査結果(各項目 16 点満点)

要素1(語学力・コミュニケーション能力)	研修前	研修後	変化
積極性	11.36	13.50	+2.14
対応力	10.86	13.06	+2.20
発信力	10.93	13.30	+2.37
論理的思考力	10.02	12.28	+2.26
人脈形成力	11.12	12.98	+1.86

要素2(主体性・積極性・チャレンジ精神)

セルフマネジメント	10.24	12.60	+2.36
批判的思考力	10.79	12.84	+2.05
メンタルタフネス	11.07	13.48	+2.41
リーダーシップ	10.69	12.20	+1.51
探求心・やり抜く力	11.79	13.54	+1.75

要素3(異文化に対する日本人のアイデンティティー)

アイデンティティー	12.05	13.18	+1.13
日本というアイデンティティー	10.05	12.86	+2.81
異文化適応力	12.23	14.12	+1.89
偏見・バイアスのコントロール	12.70	14.04	+1.34
国際教養	11.90	13.08	+1.18

平均: +1.95

(参考 昨年度: 平均: +2.17)

E Interview Test 調査結果から

研修前、研修後での Speaking 力の伸びを測るため、NET による Interview Test を研修前後に実施した。評価の観点は、「発音」「語彙」「平均発話長」「文法」「リスニング」の 5 点において計測した。今回は研修参加者 40 名中 8 名を対象に行った結果、トータルの得点の上昇率は 26.7%だった。平均の項目別推移は以下の通り。

	研修前(7点満点)	研修後(7点満点)	伸び(率)
発音	4.42	5.29	+0.87 (+19.7%)
語彙	3.71	4.88	+1.17 (+31.5%)
平均発話長	4.38	5.13	+0.75 (+17.1%)
文法	3.83	5.17	+1.34 (+35.0%)
リスニング	4.29	5.67	+1.38 (+32.2%)

F 成果と今後の課題

- 1) ホームステイ・授業・他国の生徒との交流を通して、参加生徒はコミュニケーション能力・英語の特にリスニングやスピーキング能力を高めることができた。(生徒アンケート及び意識調査結果参照)
- 2) 英語圏の国を訪れ、また他国の生徒と実際に英語を使うことにより、今後の英語学習に対する課題を見だし、目標に向かって学習意欲を高める機会となった。(生徒アンケート参照)
- 3) イギリスの文化や、交流を持った外国人生徒の文化(イタリア、中国等)に対する関心と理解を深めることができた。(生徒アンケート参照)
- 4) 他国の生徒に日本文化紹介を行うことで、英語によるプレゼンテーション能力の向上と、今後の活動に対して自信を持てるようになった。(生徒アンケート及び意識調査参照)
- 5) 他国の文化に対して尊重し、自国の文化(日本文化)に対してあらためて見つめ直す機会となった。また、他国の生徒との交流を通して、様々な習慣や物事に対する考え方の違いを体感し、その違いを受け入れる寛容を養うことができた。(生徒アンケート及び意識調査参照)
- 6) 親から離れて生活することで、自立を促進し、積極的な行動がとれるようになった。(生徒アンケート及び調査結果参照)
- 7) 研修を通してスピーキング力を高めることができた。(上記 E 参照。)



第5章 SGH・生徒研究発表会

本校 SGH 事業でメインとしている文理学科の課題研究では、年に2度の発表会を実施している。9月下旬から10月初旬に実施する SGH 中間発表会と、2月上旬に実施する SGH 課題研究発表会である。以下、それぞれについて記述する。

第1節 SGH 中間発表会

(1)実施概要	9月27日(金)14:00～16:00(6・7限目)
(2)参加人数	発表者：SGH テーマ選択者 150 名 内訳：第2学年文理学科 362 名(うち 212 名は SSH テーマ選択者)
(3)会場と 実施形態	豊中高校視聴覚教室・特別教室・多目的教室 同時3箇所ですべて33班口頭発表 ①視聴覚教室：VISION 1 (4 班)・VISION 2 (4 班)・VISION 3 (3 班) ②特別教室：VISION 3 (6 班)・VISION 4 (5 班) ③多目的教室：VISION 4 (11 班)

(4) 目的と仮説

中間発表会は、課題研究の通常授業2時間の中で、全班が口頭発表をする昨年度の形式を踏襲した。今年度は GLOBAL VISION 1～4 で合計 33 班であったため、視聴覚教室、特別教室、多目的教室の同時3か所で発表会を実施することとした。各班に対して、研究の抽象トクトの提出を課し、6分の口頭発表においては、見やすいスライドを作成すること、必ず全員が話すこと、原稿はなるべく見ずに自信を持って発表することを課した。夏休み明けから各班が準備に取りかかり、事前にリハーサルを実施して生徒相互や担当教員からの助言を受け、発表の質を向上させた。

ポスター発表に比べてプレゼンテーション力が求められる口頭発表を全員が経験することで、最終的な論文作成や、課題研究発表会でのポスター発表、口頭発表につなげていくことを目標とする。

(5) 実施状況と当日の様子

各会場では、発表生徒、課題研究担当の教員、本校教員、運営指導委員以外に、外部の高校教員、大学や企業の関係者にもご参加いただき、程よい緊張感の中、生徒の司会で発表会を進行した。すべての班に対して、ループブックを用いた運営指導委員による評価と、生徒の相互評価を実施し、発表会後にフィードバックを行った。



特別教室の様子



多目的教室の様子

（６）生徒の声（一部を掲載）

「他の班の発表を聞いて、自分たちの班は調査が足りないと感じた。」
「発表の内容だけではなく、どう伝えるかという表現力も鍛えたい。」
「原稿を読むだけになってしまったので、話し方をもっと練習していきたい。」
「リハーサルよりも早口になってしまったので、次は時間配分を意識して発表する。」
「自分の発表箇所だけでなく他の発表箇所も理解していたから、質問にも対応できた。」
「リハーサルで質問されたところを調べておいたのでスムーズだった。」
「スライドを見ながら話すのが難しかったけど、リハーサルよりはうまくできた。」

（７）今後の課題

①質疑応答は、即座にその場で判断して適切な返答を行うだけでなく、第三者の意見を直接受けることで今後の研究を修正していくことができるため、生徒がダイレクトに成長するチャンスである。今年度も、質疑応答の時間を確保できるようにタイムテーブルを組んだが、班数が増加する中、発表の場所や時間の制限をどう調整できるかが課題である。

②昨年度の改善点である「課題を早めに設定すること、そのために中間発表会前にフィールドワーク調査を済ませ、次の段階に進むこと」に今年度も取り組んだ。夏季休業中に全班がフィールドワークを実施し、中間発表会後に二度めのフィールドワーク調査や有識者へのヒアリングなどを実施する班も数班あった。今後も、限られた期間のなかでいかに研究を深めていくかを模索していく必要がある。

第２節 SGH 課題研究発表会

（１）実施概要	２月５日（水）13:00～16:00
（２）参加人数	発表者：SGH テーマ選択者 150 名・インドネシア FW 参加者 10 名 大阪府立豊中高等学校能勢分校より 12 名 参加者：第１・第２学年生徒 722 名
（３）会場と 実施形態	豊中高校体育館 全 41 班が、口頭発表もしくはポスター発表のいずれかを行う ①体育館演台：口頭発表 4 班 ②体育館フロア：ポスター発表 30 班、インドネシア FW ポスター発表 3 班、能勢分校のポスター発表 3 班、計 36 班

（４）目的と仮説

９月の中間発表会での聴衆は、課題研究の授業中（金曜 6・7 限）に実施するため課題研究の受講者のみに限定されるが、２月の SGH 課題研究発表会では第１・第２学年生徒 722 名全員が聴衆となる。生徒らが SGH 事業を通して１年間取り組んできた研究を大舞台で発表することができるため、発表生徒にとって貴重な経験になるだけでなく、課題研究を通して生徒が成長してきた様子を学校全体で共有する機会となり、聞いている生徒にとっても大きな刺激となる。

（５）実施状況と当日の様子

昨年度と同様に、本校を会場として課題研究発表会を行った。前日までにリハーサルも実施し、当日は通常の午前中授業を行い、午後からは右表のような時程で、ほぼ時間通りに進行した。

口頭発表は 10 分、ポスター発表は質疑応答を含み 8 分を目安とした。SGH 代表口頭発表は第１・第２

13:00	開会式・あいさつ
13:05	代表発表（留学／SSH／SGH）
13:50	口頭発表
14:30	SGH ポスター発表
15:40	発表終了
15:45	運営指導委員会

学年全生徒 722 名を前にして、その他の口頭発表は第 1・第 2 学年の文系の生徒約 280 名を前にして発表を行った。その後のポスター発表では、質疑応答を含む 8 分の発表を 6 回実施。班員を、発表を行う人と他の班の発表を聞きに行く人とに分けて実施した。すべての班の口頭発表・ポスター発表に対して、運営指導委員のルーブリックを用いた評価と、生徒の相互評価と質問を行い、発表会後にフィードバックを行った。



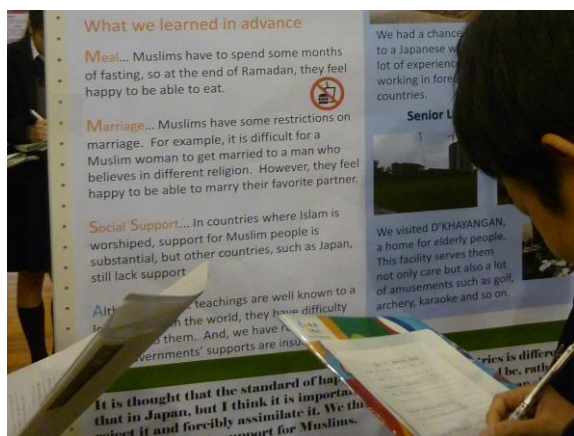
SGH 代表口頭発表「サヨナラフェアトレード」



SGH 口頭発表「ZERO ENERGY SCHOOL」



ポスター発表の様子①



ポスター発表の様子②

（６）運営指導委員コメント欄より（一部を掲載）

「研究テーマが多様であり興味深い。また、これまでの先輩の研究の蓄積が見られる。」
「研究の水準が高まっており、より課題がシャープになっているように思う。」
「中間発表に比べて、研究の深化により自分自身の言葉で話すことができています。」
「家庭学習を中心とした主体的な学びや、文武両道の姿勢が見られた発表であった。」
「ビジネスプランを考えることで論理的な思考を身に付けるということが、今後の一つの方向性として見えてきたのではないか。」
「こういった学習は新学習指導要領で求められる力の蓄積になると感じる。さらに教員の指導の蓄積も今後の役に立ち、さらに深めていけるものと感じる。」

（７）今後の課題

5 年間の SGH 指定期間の最終年度となった今年度は、上記のようにこれまでの研究や学習、指導の集大成としてふさわしい発表会を行うことができた。今後もこれらの蓄積を踏まえて、変化の激しいグローバル化社会を生き抜く力（プレゼンテーション力やディベートの基礎知識、問題解決能力）を身に付けることをめざしていく。失敗を恐れず前を向いて挑戦できるよう、生徒自身が自信を持てるような指導を継続していく必要がある。